

# 人が世界が舞台

しはたのりこ  
柴田 哲子さん

## アフガン職員の実感



管理を担当する。

きりきり痛んだと振り返る。

開発途上国への援助は、本  
当に末端まで届いているのか  
……。ふとわいた疑問をきつ  
かけに、政府開発援助(ODA)の円借款などを行う「国際協力銀行(JBIC)」を  
2006年10月に退職し、支  
援の最前線に飛び込んだ。  
退職と同時に、紛争地や被災地で活動するJENに参加。混乱が続くアフガニスタンの首都カブールの現地責任者として、井戸の掘削や女性の識字教育といった草の根事業を展開する事務所の運営・

「ニュース映像で見ていたよりも、のんびりしていて牧歌的だった」と言うアフガンの第一印象。とはいえ、稼げる人が一族郎党の面倒を見るのが一般的なアフガンで約30人の現地職員を抱え、「『自分』は一体、何人の生活を背負っているのか」と思うと胃が

JBICで旧ソ連のケルジアやアルメニアなどへの円借款業務を担当した時、「日本の常識が世界の常識ではない」ことを散々思い知らされたものの、理屈だけでは通じない、建前と本音が複雑に入り組んだアフガンの「常識」にも最初は振り回され続けた。

### ■ NGO「ジェン」事務所長

略歴 宮崎県生まれ。神奈川県立外語短期大付属高校卒業。東京外語大外国語学部ロシア・東欧語学科卒業。海外経済協力基金(現、国際協力銀行)を経て、東京に本部を置く民間活動団体「ジェン(JEN)」に勤務。

「『この所長なら、ついて行っても大丈夫』と現地職員から思ってもらえるよう」心掛け、ようやく信頼関係を築いたのもつかの間、昨春秋、新たな難問が持ち上がった。同年7月にアフガン南部で発生した韓国人人質事件を受け、日本政府から資金提供を受ける民間活動団体(NGO)の日本人職員は、アフガンに常駐出来なくなったのだ。

都イスラマバードに事務所機能の移転を余儀なくされた。思うように現場入り出来ない歯がゆさ。不安を抱える現地職員が不満を爆発させることもあったという。

だが、悪いことばかりではなかった。指示を待たなかったアフガン人職員が、自ら「先」を読んで動くようになってくれたからだ。「自立を側面から支援するのが我々の役割。今は、現地職員の成長を肌で実感出来る」と目を細める。一方、つい先日、アフガン東部では、日本人NGO職員が拉致、殺害されるという痛ましい事件が起きた。「同じ立場の者として、ご本人やご遺族の無念さを思うと、やるせなくなる。アフガンの社会不安を起ささないためには、不安を起さず、支援を継続していきたい」(イスラマバードで 佐藤昌宏、写真も)